

北海道と東北における地域資源を活かした活動

著者	水野 信太郎, 菊地 達夫
雑誌名	北翔大学北方圏学術情報センター年報
巻	5
ページ	79-93
発行年	2013
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001036/

研究報告

北海道と東北における地域資源を活かした活動

水野 信太郎
菊地 達夫

研究報告

北海道と東北における地域資源を活かした活動

水野 信太郎 菊地 達夫

1) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科 2) 北翔大学短期大学部こども学科

抄 録

本稿では今後のまちづくりに活用できる地域固有の歴史的な財産を「地域資源」と名づけて、北海道と東北における事例研究を報告する。北海道の札幌圏と、東北の岩手県内における活動に関する調査研究である。札幌圏では札幌軟石と煉瓦造の建造物、岩手県においては石川啄木と宮澤賢治に関わる建築物などを現地踏査してきた。本研究は歴史学、建築学、文学、美術の分野を横断する基礎的な調査研究である。

キーワード：石材、煉瓦、観光資源、石川啄木、宮澤賢治、自然災害

On the Activities of Utilize the Wealth of Area in Hokkaido prefecture and Tohoku region

Shintaro Mizuno・Tatsuo Kikuchi

Summary

This paper is the report on the activities of utilize the wealth of area in Hokkaido prefecture and Tohoku region. We researched on the buildings of Sapporo soft stone (the Sapporo nanseki) and bricks in Sapporo area, and explored the buildings in connection with Takuboku Ishikawa (1886-1912) and Kenji Miyazawa (1896-1933) in Tohoku area. This paper is the fundamental report of history, architecture, literature, fine arts.

Key words : stone, brick, wealth of sightseeing, Takuboku Ishikawa, Kenji Miyazawa, nature disaster

I. はじめに

学習することを思い立った人々が誰でも、いつでも、どこにおいても学習することのできる環境を保障するのが生涯学習社会である。「生涯学習」の概念には次のような2通りの考え方がある。第1は従来の「社会教育」を指す場合で、この中からは「学校教育」が除外される。学校施設ではなく、博物館や図書館などの社会教育施設においてなされる学習が「生涯学習」である。但し「学校教育」には教育を授けらるという受動的な傾向が強いのに対して、「生涯学習」の場合は自らがす

んで獲得すべき能動的な学びという概念が含まれる。

上記の内容とは全く異なり「生涯学習」がもつ2番目の意味は、「学校教育」と「社会教育」の両方を統合する大きな概念を示している場合もある。その意味においてこそ「生涯学習社会」の構築が切に望まれることになる。まさしく、どのような場面にあっても万人の学習意欲をサポートすることの出来る社会の実現なのである。

近年わが国のまちづくりにおいて、各地が固有する歴史的な遺産を前面に出すことによって、他の土地では実現が難しい特徴的な地域振興策を進めようとする動きがある。それら固有の歴史的遺産には、近代化遺産や産業遺産あるいは近代化産業遺産などの歴史的な建造物も含

まれる。これらの建築や土木構造物は、歴史学や建築学ないし技術史さらには産業考古学の研究対象ともなっている。やがては各地でまちづくりや観光資源として活用される事例も多い。

筆者たち2名は物理的な歴史遺産に限定することなく、それぞれの市町村・郡部・都道府県・地域が固有に持つ有形無形のより広範囲な財産を「地域資源」と名づけて研究に取り組んでいる。地域資源には歴史的建築物は勿論のこと、伝統的な日常生活、今日に残る伝説や記憶など文系理系を問わず、ふるさとの未来のまちづくりに役立ちそうなあらゆる財産が含まれる。まちづくりのための「地域資源」は生涯学習の範疇に含まれるものであると、わたくしども2名は考えている。

Ⅱ．北海道・札幌圏の地域資源

以下、本稿において近年の地域資源発掘の動きを見渡してみたい。

1．江別の煉瓦とN43赤煉瓦塾

まず北海道札幌地域における地域資源であるが、より古くから続いている上すでに今日でも広く認知されている江別の煉瓦に関する事項を取り上げる。江別市内における煉瓦製造の歴史は1891年（明治24年）からであるので、本年度122年ほどの歴史を誇る。しかも今なお現業の地域産業である。このことの証左のひとつになろうかと思われる事実があった。江別市の表玄関として整備が進みつつあるJR野幌駅前において、8丁目商店街が地元産の煉瓦を前面に押し出すことで、他の地域では見られない個性的な都市景観を創出しようという提案がなされたのである^{注1)}。順次整備が進み、町並みとしての風貌が完成すれば21世紀の煉瓦のまちが姿を現すこととなる。

道内最大の都市である札幌でも、また第二の都市である旭川でもない石狩管内の江別市に本拠地を置きながら、赤煉瓦建築を中心として各種の歴史的な建築物を学習・探訪する活動を続けている市民団体がある。N43赤煉瓦塾というグループである。N43とは北緯43度を意味する。この緯度には小樽、札幌、江別、岩見沢、三笠、夕張、帯広、釧路などが位置している。したがって当該塾は江別市のみを活動エリアとして限定するものではなく、全道的な地域を視野に入れながら歴史的な建築物を学ぶ活動をしている。

N43赤煉瓦塾の発足は1999年（平成11年）であるが、本年度の活動としては2012年（同24年）5月19日（土）に午前から午後にかけて札幌市白石区に往時の煉瓦工場跡を訪ねることから始まった。1884年（明治17年）創業

の鈴木煉瓦工場という半ば国策会社に近い性格を有した、札幌の中心的大煉瓦会社の痕跡を訪ね歩くという見学会である。鈴木煉瓦の製品は、札幌の赤煉瓦として知られる北海道庁旧庁舎ほか道内の主要な歴史的煉瓦造建築に使用された。またN43赤煉瓦塾は、7月14日（土）に第23回えべつやきもの市の会場で、恒例メインイベント「れんがドミノ倒し」の準備を担当した。2012年の煉瓦をドミノのために並べていく作業である。

さらに2012年9月29日（土）の朝から江別市の少し北方方面へ向かったのが、屋外での見学会としては年内最後の活動であった。「N43赤煉瓦塾 第74回 赤れんがセミナー（見学会）」として同日の9時30分にJR野幌駅前で集合。この日は「月形・岩見沢」の水道遺跡を訪ねた。月形町にある樺戸集治監跡には、この施設が開庁した時からの重要な水源であった煉瓦造の遺構が残されている。1881年（明治14年）からの水源関連施設である。

時代は後年のことになるが岩見沢市には、より近代的な水道施設が完備された。岩見沢水道発祥の地における施設で、1908年（明治41年）のこと。これは函館に次いで道内2番目の早さであり、全国でも13番目という歴史をもつ。現在も赤煉瓦を外観にみせる煉瓦造の水道塔ほかが残されている。

なおN43赤煉瓦塾では冬季間の11月から翌年3月まで、野幌駅南口から東へ徒歩5分ほどの地点にある旧肥田（ひだ）製陶所内の「グレシヤム市アンテナショップ」を会場として学習会を開催している。本年度は2012年（平成24年）12月1日（土）に「煉瓦と屋根材」、2013年1月26日（土）が「煉瓦と窓材」、そして同年3月16日（土）は「煉瓦と鋼材」を学んだ。

教室となる前記のアンテナ・ショップは、江別市が姉妹都市・友好都市となっているアメリカ合衆国オレゴン州グレシヤム市と日本の高知県土佐市、両市の特産品などを展示・販売している施設である。その建築物自体は1951年（昭和26年）に竣工し、翌々年の1953年に大規模な増築をして今日を迎えた煉瓦造の旧工場建築である。アンテナ・ショップは、その一部分を整備して活用されている。

煉瓦という実用的な建築材料ばかりでなく、北海道出身の文学者たちも地域固有の財産である。直接、札幌圏に結びつくものではないが、小説の舞台に札幌を選んだ作品もある、旭川出身の女流文学者に三浦綾子（みうらあやこ・1922～1999）がいる。旭川駅の南西方向1.5kmに位置する三浦綾子記念文学館や外国樹種見本林の地図まで添えられた特集新聞記事^{注2)}が目を引いた。その中で新聞発表の2箇月前に新しく設置されたばかりの「ほっかいどう100の道／氷点通り／Hyouten dori」と

いう案内板を示す写真も掲載されている。三浦文学の原点である『氷点』という作品そのものと、これに因む場所性の、ソフトとハード両面これこそが地域資源である。

実は現在の旭川市にとって特筆することのできるほど大きな産業のひとつは、いまや観光業となっている。旭川市立旭山動物園をはじめとして、前述の「三浦綾子記念文学館」ならびに「外国樹種見本林」も同市における重要な観光拠点であることは間違いない。なお同記念文学館の森下辰衛特別研究員は三浦綾子読書会代表でもある。同氏からは、この読書会が江別市内で開催された最初から御指導を受けている。この読書会の継続なども、それ自体が生涯学習の端的な実践例である。

2. ポルトの活用と発信活動

次に札幌市内での活動を報告したい。本学の北方圏学術情報センター（通称：ポルト）の機能と施設を活用しながら、より積極的な研究・発信作業をしようというセンター長からの提言を受けて「地域資源」グループでは、下記のようなシンポジウムを開催した。日時は2012年7月29日（日）の午後であった。会そのもののタイトルは、「北海道における地域資源を活かしたまちづくり」。全体の企画・人選と講演依頼そして当日の司会と時間調整は水野信太郎が担当した。

発表時間は14時から本学短期大学部教授の菊地達夫（写真－1参照）が人文地理学の立場から講演した。その後14時30分から札幌建築鑑賞会メンバー中村祐子氏（写真－2参照）が市民活動としての地域調査を具体的に報告した。10分間の休憩ののち、15時10分から前述したN43赤煉瓦塾事務局長の石垣秀人氏（写真－3参照）が江別市役所環境課職員としての実務も交えながら文系理系・有形無形にわたる立体的な話題を提供した。

より正確な講演内容を示す演題は菊地の「地理学と自然遺産・文化遺産」、中村氏の「札幌軟石発掘大作戦」、石垣氏の「江別市の自然遺産と文化遺産」である。以上の3パネリストによる講演を終え、14時40分から全体討議に入った。会場からは意外にも赤煉瓦と煉瓦造建築に関する質問など、市民団体のメンバーとして建築物の調査活動が続ける人々にとって知っておきたいと日頃から感じてきた詳細な問いかけがなされた。最後の全体討議も進行役は、水野が務めた。

なおポルトを様々な研究活動の場にしようとする試みは、本年度だけでも上記シンポジウムのほかに幾例かが見られた。2012年11月11日（日）の13時から、札幌軟石発掘大作戦の本年度調査の実施区域である西区で各調査員が調べてきた成果を、ポルトに持ち寄った。その最終成果物として、札幌軟石の使用実例がどのように分布

しているのかをまとめた結果を、西区中心部を示す大きな地図に完成することが出来た。

また本年度の下半期には、平成24年度札幌市大学提案型共同研究事業として採択された「創造都市さっぽろ」のシンボルエリア創出に向けた円山地区のブランド化のための調査・研究が、ポルトを中心的な研究施設として展開された。この研究の場合などには単に研究施設であるという機能を超えて、ポルトが立地している場所性もきわめて重要な要素となってくる。

北方圏学術情報センター（ポルト：この語の原意は港・多くの人々が集う場所）の所在地は、札幌市中央区南1条西20丁目である。ポルトの一角は東側にテレビ塔が建つ大通公園、西は北海道神宮や円山競技場と円山動物園がある丘陵地に位置している。これも有形無形の地域資源の一例であろう。

3. 札幌の石造建築と軟石調査

札幌には「札幌建築鑑賞会」という、歴史的な建築物を訪ね歩き、建物の由来を聞き、ある者は写真撮影をし、別のメンバーは絵に描き、会員によっては版画を彫り、時として模型にまで仕上げ、記録となる記述をする市民のグループがある。その市民グループ札幌建築鑑賞会にとって、本年は最大の活動が2点あった。

ひとつは先述した「札幌軟石発掘大作戦」の継続で、本年度は札幌市西区を悉皆調査するというものであった^{注3)}。水野自身が担当したエリアに残存していた物件の一例を写真－4に掲げる。これは医薬品会社である企業「ほくやく」が大切に使用している石造の倉庫である。場所はJR 発寒中央駅の北側に位置する。駅から至近の距離というだけでなく、線路沿いの広い公道に面しているため道を往来する人や自動車などに石積みの外観を見せている現役の建築物である。

ただし当該石造建築に関しては竣工年代が不詳であり、それから使用されている建築石材が「札幌軟石」だけではなく、おそらく「小樽軟石」が含まれているであろうことが指摘されている。内部に入れていただいたので屋根を支える木造の小屋組を見ることができた。その結果、建築年に関しては古い要素と新しい要素の両方が混在していることを確認している。

しかも外観に現れている石種からは、札幌軟石よりも小樽産の石材の方がむしろ大量に使用されているようである。今後より詳細な調査が待たれるところであるが、仮に現時点での懸念が正しいとすれば、写真－4の建築物は札幌市内に現存する「小樽軟石」の貴重な遺構という新しい価値付けが誕生することとなろう。

札幌建築鑑賞会による一般市民向け啓発活動は、本年度も並行して続けられた。札幌軟石の話題に限ってみて



写真－１ シンポジウムで講演する菊地達夫教授



写真－４ 発寒中央駅前の「ほくやく」石造倉庫



写真－２ 札幌建築鑑賞会の中村祐子パネリスト



写真－５ 札幌市清田図書館で開催された啄木展



写真－３ 発表するN４３赤煉瓦塾の石垣秀氏



写真－６ 参集頂いた花巻煉瓦工場の関係者一同

も調査中の「西区」ではなく、実際の軟石を切り出す山が存在する「南区」の既存調査結果を公開する活動もあった。これは2012年10月21日（日）の朝9時から、札幌市南区真駒内2丁目の南区民センター1階玄関ホールにて展示作業を開始した^{注4)}。

4. 失われた旧サーモン館の価値

先に触れた本年度の札幌建築鑑賞会にとって2点目の大きな活動は、札幌市の都心に昨年まで現存していた旧王子サーモン館に関する追跡調査と価値の評価であった。外観に塩焼き煉瓦をあらわにする切妻屋根2階建ての、この煉瓦造建築は残念なことに2012年2月に取り壊されてしまった^{注5)}。

塩焼（しおや）き煉瓦とは「赤瓦（あかがわら）」の製造方法と同様に、煉瓦の焼成工程の最終段階で、窯の中へ岩塩を投入してつくられる煉瓦である。この投塩作業によってナトリウム分が蒸気となり、窯内部の煉瓦と内壁などあらゆる物の表面に定着する。この施釉された層は外観が光沢を呈するという利点だけでなく、撥水性を有し吸水もしない。このため厳しい寒さに曝される北海道の冬季間にあっても凍害をおこさない。そのように優れた塩焼き煉瓦を、外観の基礎から軒先まで全面に積み上げた実例が旧王子サーモン館であった。きわめて贅沢な仕様の実例である。

旧王子サーモン館は、手を尽くして保存要望を繰り返したものの、関係者の理解を得られず解体された^{注6)}。ただ解体されてしまってから札幌建築鑑賞会は、実に特異な動きを開始する。それは失われてしまった建築物の価値を本気で評価しようとする努力であった^{注7)}。しかも解体された建築物は元来、自分たちの所有物件でもないのに、失われた後になってから調査・探求を深めていくこととなる。不思議で奇異な行為であったといえよう。

技術史の調査・研究には、分解や解体を試みなければ詳細な実態を知ることが出来ないという限界がある。つまり内科学だけでは肉体の内部でどのような状況が生じているのか、よく解らないというような事例に似ている。外科的な処方や究明方法が望まれるのである。今回の旧王子サーモン館の場合には外装を仕上げていた塩焼き煉瓦は、江別市元野幌で現業の米澤煉瓦が製造した品であることが一部分を解体して初めて判明した。躯体を構築していた煉瓦に「2」という数字が刻印されていることが、解体の段階や作業の合間をみて進められた確認調査の中で発見されたためである。

旧王子サーモン館は元来、第二次世界大戦後の食料事情を改善しようとして搾乳業界の人々が当時もてる力を結集して新築した「北海道ホルスタイン会館」であっ

た。札幌市中央区北1条西1丁目という都心ではあるが、この場所は酪農に縁が深い土地であった。それは、この一帯を札幌酪農業協同組合が所有していたことによる。今日の「サツラク」農業協同組合である。創世川沿いの北東角には、かつて「サツラク ミルクプラント」が建てられていた。1933年のことである。のちには土地の所有関係者の中に雪印乳業も関与する。それは1961年であった。

問題となった「北海道ホルスタイン会館」のちの「王子サーモン館」は、1949年（昭和24年）11月に竣工した。昭和24年といえば、日本中が敗戦の惨めさの中にあった時期だ。やがて王子製紙グループが1964年（昭和39年）に土地と建物を購入。このような経緯の中で、札幌の都心を訪れた人々が目にした「王子サーモン館」としての再利用・活用の時代が続いたのであった。

さてポルトを利用しての市民による地域資源活動であるが、王子サーモン館に関しては次のような企画を立てて実施した。2012年（平成24年）10月8日（月）体育の日に、北翔大学北方圏学術情報センター「ポルト」6階会議室Bにおいて13時30分から「王子サーモン館 “記録と記憶” プロジェクト／煉瓦活用 ‘アイディアカフェ’」が開催された。ワークショップ形式で参加者が数班に分かれ、各自が解体された旧王子サーモン館の記憶を現地に残すためには、どのような仕掛けをすれば良いと思うのかを1人3つずつのアイディアとして提案するものであった。

本稿の主題である「地域資源」は、特定の近代建築作品に限定しているわけではない。ましてや札幌圏に集中しているものでも決してない。目に見えやすい対象である建築物だけに限っても、道北地域、道東地域、道央地域、道南地域に、それぞれ分布している^{注8)}。したがって今後とも各地が、これらの資源を活用して個性的なまちづくりを展開することが期待される。

Ⅲ. 東北・岩手県の地域資源

続いて東北地域とくに岩手県内における地域資源の発掘と活用に関する試みを見ていきたい。東北一帯の中でも太平洋岸の3県すなわち岩手・宮城・福島は、2011年（平成23年）3月11日金曜日の午後2時46分に発生したマグニチュード9.0の東日本大震災によって歴史的な激甚災害を受けた。そして、この災害の影響は今日なお大きな被害として続いている。

そのように厳しい日々の中で、被災者と支援者を問わず多くの人々から共感の声が聞こえてくる岩手県出身の詩人たちが2人いる。兩人とも著名な文学者たちで、石川啄木（いしかわ たくぼく・明治19年～明治45年）と

宮澤賢治（みやざわ けんじ・明治29年～昭和8年）である。啄木と賢治はともに身体と精神の両面で苦しい人生を駆け抜け、ついには若くして病没した。だが彼らの視線は終生、弱者へのまなざしを失うことがなかった。生涯を貫いたそのような姿勢から、とくに東日本大震災後の日本国内外において石川啄木と宮澤賢治への共感が高まっている。そのような点を背景にして、本稿では彼らを学ぶことで地域固有の財産を見直そうとする人々の活動に注目していきたい。

1. 石川啄木をめぐる動き

石川啄木の「啄」の文字が、通常のパーソナル・コンピュータやワード・プロセッサでは用意されていない活字である。このため本稿では不本意ながら、「啄」の字をもって石川啄木の標記に代えさせていただく。お許し願いたい。

以下、啄木に関係する近年の動静について述べる。啄木に関する活動は東北のみに限らなかった。北海道の地にあっても、啄木をめぐる歴史的な動きは続いた。それは彼が生前、北海道と深い縁で結ばれていたことによるのは勿論である。そのうえ昨年2012年、平成24年は、啄木没後100年目に当たっていたからである。

石川啄木は1886年、明治19年に岩手県で生まれた。したがって啄木を東北の地域資源とするのは当然であるが、一方で啄木はそのような狭いエリアだけでの影響を超えているのが実情である。このためここでは東北の地域資源という小見出しでありながら、北海道における活動が相当数含まれることを断わっておく。

平成24年は啄木が他界して100年目ということを契機として、さまざまな地域での動きが見られた。第一に文学碑の建立は華々しかった。いままで石川啄木の碑がなかった北海道旭川市に、啄木文学碑^{注9)}を新たに設けようとする活動が続けられた。その結果、実を結ぶこととなる^{注10)}。また札幌においても新しい啄木の歌碑が建立された^{注11)}。さらに道外での活動であるが、東京においても啄木終焉の地に文学碑を整備しようという運動が動き始めている^{注12)}。

一方で一般の読者に石川啄木の生涯を再度広めようという動きもあった。この傾向は北海道全域を主要な活動の舞台とする新聞社において顕著であった。道内出身者ではないのに啄木の墓が、なにゆえに函館の地にあるのか^{注13)}。いまなお現在に至るまで人々の心に残る啄木とは何であるのか、その影響は現代社会のどこにのこっているのか、などの問いかけである^{注14)}。

新聞社に勤務する現役記者の手になる記事ではなく、文学関係者や一般の読者からの寄稿も少なくなかった^{注15)}。それらの文章の中には、札幌の都市景観すなわ

ち地域資源として位置づけることが可能である要素に言及した内容も含まれている^{注16)}。

また啄木研究は北海道と東北両地域をも越えていた。著名な詩人あるいは文学者・美術家たちは作品への関心だけでなく、その容貌と彼らが旅をした土地の風景とともに写真を掲載しながら巧みに編集された書籍で扱われることが多い。石川啄木と宮澤賢治は従来この種のビジュアルな文献に、たびたび登場してきている。

それでも平成24年が没後ちょうど100年目であった啄木に関しては、さらに新しい大判の本が出版された。『別冊太陽 日本のこころ195 石川啄木 漂白の詩人 没後100年記念』である^{注17)}。同書には北海道の研究者も執筆している。江別市にある北海道情報大学の立花峰夫教授である。氏は北海道在住であり在勤の研究者であるが、この書籍においては啄木の東北時代つまり「ふるさと」時代の生活に関して執筆しておられる。「啄木の残像 代用教員と啄木」ならびに「啄木の残像 浜民村の啄木の風景」である^{注18)}。氏は札幌圏での生活だけでなく、啄木にとって道内最後の勤務地であった釧路にも、ご自身が在勤在住された経験がある。そのみでなく立花氏は、啄木の故郷である岩手県洪民の出身で、洪民小学校の卒業生でもある。

同書には、国際啄木学会において以前より水野が特段の高配を賜っている佐藤勝氏も研究成果を発表された。佐藤氏は国際啄木学会の理事であると同時に、湘南啄木文庫の主宰者でもある。この本の中では氏は、特に啄木をとりまく人々に関する記述を担当している^{注19)}。その他の内容では啄木の「雅号」ペンネームの変遷や「歌集『一握の砂』所載の広告文」についてなど、独特の視点が見られる^{注20)}。

ふたたび札幌での活動となってしまうが、「没後百年 石川啄木の世界」写真パネル展（写真－5参照）が札幌市清田図書館において開催された。これは同図書館の森昌彦司書による長年の蓄積が背景にあってこそ、はじめて実現した展示会である^{注21)}。このように丹念な地域資源発掘の努力が、各所において継続されているのである。この森司書は26年前の石川啄木生誕100年の際にも、別の図書館にあって啄木に関する企画展を実施したという。

展示会の期間は2012年10月25日（木）～11月13日（火）、このようすを写真－5に掲げる。これと連携する形で講演会がもたれた。11月11日（日）の14時開始で、演題は「没後百年石川啄木と現在「時代閉塞の現状」から見えるもの」であった。講師には北海学園大学の田中綾准教授である。田中氏は『北海道新聞』の「石川啄木 没後100年⑨⑩／啄木短歌を見つめ直して^{注14)}」のなかで、作家新井氏と対談をした北海道の研究者であ

る。さらに同図書館内では森司書によるブックトークが11月8日（木）14時からなされた。

2. 宮澤賢治をめぐる動き

以下の文章中には「宮澤賢治」という旧字表記と、「宮沢賢治」とする新字体による表記の両方が混在する。これは賢治自身の本名としては旧字であったことを踏襲する表記と、現代社会においてより多くの方々に賢治を理解してもらいたいとして新字体を採用する立場の双方があることによる。本稿では両者の姿勢を尊重し、それぞれの出典に従った表記をそのまま用いる。なお筆者自身は「宮澤賢治」という賢治自身が記した旧字体の文字を、本文の表記として使用することを基本とする。

宮澤賢治に関する記述も石川啄木の場合と同様、北海道内での動きから始める。北海道の胆振支庁に含まれる勇払郡むかわ（鵠川）町において、賢治作品を再現したまちづくりが始まっている。この地域は旧穂別町の富内（とみうち）地区。鵠川という河川に沿った地域である。この地でかつて走っていた鉄道廃線の危機を契機として、1923年（大正12年）開通時の駅舎や鉄道関連設備を活用して『銀河鉄道の夜』の世界を再現しているという^{注22)}。まさに「地域の資源」へのまなざしが、ここにある。

札幌圏の江別市では2013年の2月に、江別市情報図書館（本館）エントランスホールにて特別展示『宮澤賢治没後80年／生誕101年の／江別文学者／小田邦雄とともに』が催された。織田邦雄は本名を小田正夫といい、1912年（明治45年）1月24日の江別生まれで、没したのは1965年（昭和40年）5月17日。この地域の図書館にあって催された企画は、ささやかながら宮澤賢治の世界と地元の人々への思いを示す展示であった。

北海道に限定しない活動もあった。世界的な音楽家が自作の音楽作品を発表するのに、北海道生まれのキャラクターを起用して初演を成功させた事例である。シンセサイザーを駆使した作曲家として広く知られる富田勲氏の新作交響曲「イーハトーブ」の発表会である。2012年（平成24年）11月24日、東京でのことであった。そのメイン・ボーカルとして初音ミクという北海道から発信されたバーチャルなキャラクターを登場させたという。賢治の仮想世界を表現・再現する手法としては、当を得た成功例といえよう。ここにも東北地域の宮澤賢治と北海道初の現代情報技術にかかわる両者とのつながりが、やはりあった^{注23)}。

書籍の分野でも宮澤賢治の作品に新しい動きがあった。芸術作品の電子情報化という今日の趨勢は大きい。国立国会図書館においても膨大な蔵書の一部分が電子化され始め、図書館という社会教育施設・生涯学習機関に

まで現実には足を運ぶことなく、どのような場所にあっても万人が貴重な書籍の内容を読むことが出来る時代となっている。そのような状況の範囲内に宮澤賢治作品も、徐々に含まれていくこととなるであろう^{注24)}。今回は賢治の作品から『春と修羅』そして『四又の百合』の2作品が配信されるという。

日本近代文学作品の中では夏目漱石の『硝子戸の中』、永井荷風の『腕くらべ』、柳田国男の『遠野物語』など、大半の著作者は1作品のみが選ばれたようだ。賢治の2作品以外に複数の文学作品が配信されることとなった作家は、『羅生門』と『河童』がとりあげられた芥川龍之介のみである。

宮澤賢治の童話世界は2012年夏に劇場用アニメーション「グスコーブドリの伝記」が発表されたほか、テレビ版の映像作品「注文の多い料理店」など数作品が制作された。賢治作品の映画化、映像化の背景には、やはり東日本大震災後の人々にとって心の整理や未来に向かおうとする姿勢が少なからず関係しているように思える。

3. 宮澤賢治と煉瓦の建築

宮澤賢治は文学者であり自然科学研究者であった。そのような彼が建築用煉瓦にも浅からぬ縁を有していた。この点については既に産業考古学会へ水野が昨年、報告している^{注26)}。実は煉瓦建築というものはそれ自体が文学作品の対象であったり、美術のモチーフともなり得たり、窯業技術や構造工学分野の研究テーマであったりする多彩な側面をもつ存在である。そのような煉瓦という素材は賢治のごく身近にあった。

昨年の産業考古学会への文章には北上川右岸に立地していた旧煉瓦工場の古写真を添えて報告した。ところが、それをより掘り下げるため2012年9月4日火曜日の9時30分に旧花巻煉瓦工場（はなまきれんがこうじょう）の姿を知る方々が、JR花巻駅前のホテル・グランシェール1階奥の個室にお集まりくださった。写真-6の皆さんである。

同工場は大正13年に創業され、少なくとも第二次世界大戦後の昭和25年の時点では、伊藤祐武美（いとう・すけぶみ）が経営していたという。この伊藤の令嬢が、写真-6の後列中央に立つ伊藤明子（いとう・あきこ）氏である。前列向かって左側のお二人は、菅原勝男（すがわら・かつお、弟。写真の左端）氏と菅原忠男（すがわら・ただお、兄。）氏ご兄弟である。菅原兄弟は煉瓦を焼成・製造する仕事ではなく、花巻煉瓦工場の製品を使って煉瓦造建築を積み上げる職人であった。兄・忠男氏は昭和25年から平成10年まで煉瓦工を続け、弟・勝男氏は昭和33年以降いまなお現役でいらっしゃる。

前列に座っておられる女性が駿河サダ（するが・さ

だ)氏で、この方は昭和18年から花巻煉瓦工場に勤務された。工場では当時から動力を用いた土練機(どれんき)で成形しており、女性の業務としては乾燥工程の中でシッペを使って、製品の変形を修正する仕事であったという。「シッペ」とは、他の地域では「シッペ板(しっぺいた)」とも呼ばれる木製の道具である。機械から抜き出された直後の湿った「生(なま、同工場での呼称。他の地域では青太・アオタなど)」を乾燥場(かんそうじょう、同じく同工場での呼称)に設けられた棚にのせて、ゆっくりと乾かす。すると徐々に生地から水分が抜けていく。ところが生地は成形された直方体のまま、素直に乾燥・収縮することはなく、必ず不正形な変形をおこす。この現象を窯業界の技術者たちは「あばれる」と表現する。この「あばれ」を修正するために、花巻煉瓦工場では「シッペ」と呼ぶ板状の道具で、素地(生地よりも乾燥した焼成前の半製品:同工場では白太・シラタと呼んだ)の表面をたたいて補正した。このように煉瓦を乾燥させる工程では、理想的な形状を保つために手間のかかる作業が必要であった。そしてシッペによる仕事は、全国的にみても大半の工場で女性たちが担当した。

この日の聞き取りからは実に貴重な証言を数多く得ることが出来た。たとえば菅原兄弟が施工した煉瓦造建築の実例など、こののちも追って現地踏査を続けたい内容が多分に含まれていた。また同席して下さった岩田和夫氏、栗原浩太氏、高橋二三夫氏などからの御教示も今後の調査課題となる。

ただヒアリングの中で教えられた1点を明記しておきたい。イギリス海岸へのアプローチ道路左手に現在も残る煉瓦造の基礎は、かつての東北陶器(株)の布基礎(ぬのぎぞ、連続する基礎)である。この場所は後に花巻商業高等学校として利用された。同高等学校は現在、花巻東高等学校と名称を変更して別の敷地において教育を続けている。

2012年9月3日月曜日の夕刻5時には古舘正壱氏から煉瓦だけではなく、屋根瓦の製造史も含めて聞くことが出来た。古舘家は現当主を含めて4代前から生活雑器を焼いてきた。屋号は「瀬戸屋」とのこと。東北本線の開通が明治24年であるが、それまでは鉄道工事用の煉瓦を製造していた。なお、ここで特筆しておきたいことは、宮澤賢治が自らの詩歌に謳いあげている「煉瓦」や「煉瓦煙突」は、前述した花巻煉瓦工場のあった北上川沿いではなく、市街地の南方向にあった窯業地帯であろうという点である。具体的には瀬戸屋側の「藤沢町」や「若葉町」そして原土を採掘した「諏訪」などの方面であった。この事実なども今後の大きな研究課題である。

宮澤賢治にとって最も身近な煉瓦造建築があった。賢

治の母親イチ(旧姓も宮澤)の実家である宮澤善治家に2棟の煉瓦造倉庫が現存している。1棟は2階建てで、もう1棟は平屋(1階建て)である。ところが非常に興味深いことに、これらは2棟とも赤い色をした煉瓦ではなく白色を呈する煉瓦を積んで構築されている。それは外観ばかりでなく、屋内側の煉瓦も同様である(写真-7参照)。

その白色煉瓦に関しては、現時点では鉾澤(こうさい)煉瓦であると考えている。鉾澤煉瓦とは、鉄鉾石から粗鋼を採取したあとに残る岩石の砂分である。現在はこの残渣物を利用して「鉾澤セメント」という建設用のセメントを大量に生産している。

煉瓦ならびに建築用窯業材料の国産史を研究テーマとする水野としては、おそらく岩手県内に立地するいずれかの製鉄所から出された鉾澤を有効利用して、宮澤家の煉瓦が製造されたと類推している。ただ残念なことに釜石製鉄所は第二次世界大戦で被害を受けており、このため歴史的な資料を焼失している。後考に待ちたい。

宮澤善治家の現当主であられる宮澤啓祐氏(善治を1代とすると4代目)の御好意によって、つぎのような事実も判明した。宮澤家が経営する「宮澤商店」において昭和7年時点で煉瓦を扱っていた点である。文学者・宮沢賢治と煉瓦のつながりが、さらに確認されることとなった。それは新聞に掲載された広告の一部分^{注27)}であるが、ライジングサン石油株式会社代理店/合名会社/宮澤商店/電話四番/振替仙台二三五四番と店名を明記した上で、機械油 蠟燭/砂糖 水飴などに並んで練瓦^(ママ)という取り扱い品目が明記されている。

4. 小岩井農場の賢治作品展示

岩手県盛岡市の西方に位置する岩手郡雫石町丸谷地の小岩井農場は、1891年(明治24年)に土佐藩出身の小野義真(1839~1905)と同じく土佐出身の岩崎彌之助(1851~1908)と長州藩出身の井上勝(1843~1910)が開拓を始めた民間の大規模農場である。彼ら3人の姓から一文字ずつをとって「小岩井」と名づけた。小野は日本鉄道会社の副社長、岩崎は三菱社の社長、井上は鉄道庁の長官として知られる有力者たちである。農場は防風林を植樹することから始め、1899年(明治32年)になってから牛乳の市販を開始する。バターの販売開始が1902年(明治35年)、チーズの販売開始は1932年(昭和7年)であった。

その小岩井農場において、2012年4月20日(金)から同年11月4日(日)にかけて平成24年度企画展 新鮮な奇蹟 宮澤賢治の「小岩井農場」と題された特別展が開催されていた。会場の最初に「ごあいさつ」として

宮澤賢治が初めて小岩井農場に足を踏み入れたのは、



写真-7 宮澤家2階建て煉瓦蔵の出入口アーチ



写真-10 盛岡市市街にあの岩手県公会堂ホール



写真-8 小岩井農場での賢治作品展示のようす



写真-11 宮沢賢治像と岩手大学農業教育資料館

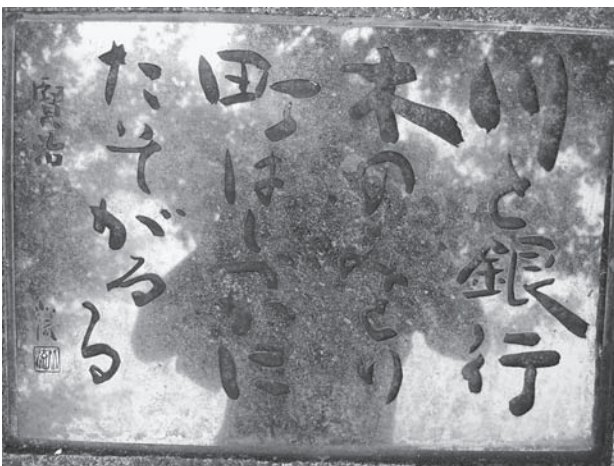


写真-9 中津川右岸にある宮沢賢治作品の詩碑



写真-12 最後の見学会当日の旧王子サーモン館

明治43（1910）年と言わ／れています。その後幾度となく農場を訪れた賢治は、今からちょうど90年前の／大正11（1922）年に長編詩『小岩井農場』を著しました。25歳の時です。（後略）とある。この展示で感心した点は、小岩井農場が登場する宮澤賢治作品をすべて把握し、それを今回の展示内容で披露していたことである。

これは地域資源としての小岩井農場の姿勢を示すだけでなく、宮澤賢治研究の資料としても意義深いことと考える。2012年現在の文学史の資料として記録する価値がある。以下に水野が展示会場で控えてきた内容を採録する。

春谷暁臥 一九二五， 五， 一一， （3 ページ分）

春谷暁臥【先駆形】 一九二五， 五， 一一， （2 ページ分）

遠足統率 一九二五， 五， 七， （3 ページ分）

ここでいう「博物館」とは、／当資料館の前身であった／「陳列館」のことです。

遠足統率【先駆形A】 一九二五， 五， 七， （2 ページ分）

遠足統率【先駆形B】 一九二五， 五， 七， （3 ページ分）

母に言ふ 一九二四， 一〇， 二六， （3 ページ分）

＊この詩は「野馬がかってにこさへたみちと」【「春と修羅」・第二集・三二九】の第一形態だ／ったようです。大正十三年十月下旬，たぶん鬼越坂を越えて小岩井農場を通り抜けようとして／矢取森あたりで迷い，牧夫に道を教えてもらったという至って平凡な詩ですが，広大な農場風／景の描写などに，すてがたい情趣が見られます。

〔野馬がかってにこさへたみちと〕

一九二四， 一〇， 二六， （2 ページ分）

〔野馬がかってにこさへたみちと）【先駆形B】

一九二四， 一〇， 二六， （2 ページ分）

遠足許可 一九二四， 一〇， 二六， （2 ページ分）

塔中秘事 一九二四， 一〇， 二六， （1 ページ分）

塔中秘事【先駆形1－1】 一九二四， 一〇， 二六， （1 ページ分）

塔中秘事【先駆形1－2】 一九二四， 一〇， 二六， （1 ページ分）

塔中秘事【先駆形1－3】 一九二四， 一〇， 二六， （1 ページ分）

塔中秘事【先駆形1－4】 一九二四， 一〇， 二六， （1 ページ分）

塔中秘事【先駆形1－5】 一九二四， 一〇， 二六， （1 ページ分）

塔中秘事【先駆形1－6】 一九二四， 一〇， 二六， （1 ページ分）

塔中秘事【先駆形1－7】 一九二四， 一〇， 二六， （1 ページ分）

〔瘠せて青めるなが頬は〕 一九二四， 一〇， 二六， （1 ページ分）

青柳教諭を送る【〔先駆形〕先駆形1】

一九二四， 一〇， 二六， （2 ページ分）

青柳教諭を送る【〔先駆形〕先駆形1手入れ稿】

一九二四， 一〇， 二六， （2 ページ分）

※青柳亮（明治二十二年六月十五日～昭和二十四年一月三十日）／島根県生まれ。明治四十三年東京外国語学校英語科卒業。四月から盛中教諭とな／る。同年十月十六日，生徒への告別式があり，十一月十四日付け依願退職。四十四年一月，／松江六十三連隊に一年志願兵として入隊。

〔ま青きそらの風をふるはし〕 （2 ページ分）

〔ま青きそらの風をふるはし）【先駆形1】 （2 ページ分）

おきなぐさ （6 ページ分）

注釈

＊毛茛科 毛茛は訓でウマノアシガタ。キンポウゲのこと。アネモネも毛茛科。キミカゲソウ／（スズラン）カタクリはユリ科。毛茛科は双子葉植物綱，ユリ科は単子葉植物綱。

＊七つ森 小岩井農場の南にある丘。小さく起伏する山頂が七つあるというのでついた名。なお，東北地方では山のことを「森」と呼ぶことが多い。

*変光星 一定の周期で光度が大きくなったり小さくなったりする恒星。／本当は色は変わらない。

秋田街道 (4 ページ分)

小岩井の育牛長の一人子と (2 ページ分)

この一冬は机ならぶる 宮沢賢治の初期短歌 (明治四十四年一月)

宮沢賢治と盛岡中学二年のとき机を並べていた武安丈夫は、小岩井農場育牛部職員の／長男でした。そのとき賢治は右のような短歌を詠みました。この歌の中で、『育牛長の／一人子』とありますが、実際は丈夫の父、武安陽吉は「技手」であって「育牛長」／ではありませんでした。当時の育牛長は下総御料牧場から鳥取県技師となり、その後小／岩井農場へ勤務した窪田五郎という人でした。

盛岡中学二年の宮沢賢治 (後列右) と武安丈夫 (後列左)

写真

耕耘部の時計 (7 ページ分)

*宮沢賢治の童話『耕耘部の時計』に、ひときわ精彩を放つ柱時計は巴里 (パリ) 製だった／ようです。この時計は大正十二年の耕耘部事務所の火災により、事務所と運命を共にして／燃え尽きてしまいました。現在農場には残念ながら、同様の時計は見あたりません。

狼 森と 盗 森

(10 ページ分)

注釈

狼森, 策森, 黒坂森, 盗森 おらはなってもとらないよ

という以上の内容である。なお小岩井農場における賢治展のようすを、写真－8 に掲げる。

5. 都心における地域資源

つぎに都心に残る地域資源を見ていきたい。物的な資源を岩手県盛岡市内に訪ねた。写真－9 は中津川の右岸で、盛岡市役所の背面に位置する宮澤賢治の文学碑である。

川と銀行／木のみどり／町はしづかに／たそがるるという七五調の詩歌を刻んだものである。この作品に詠われている川は「中津川」そのものであるが、「銀行」とは1911年 (明治44年) に竣工した盛岡銀行本店という煉瓦造建築である。この詩碑の対岸に今も岩手銀行中ノ橋支店として現役の銀行建築である。この設計者は東京駅の設計者で、辰野金吾と葛西萬司が主宰していた設計事務所である。この建築物は国の重要文化財に指定されている。

写真－10 は岩手県公会堂の大ホール内部である。この搭状正面をもつシンボリックな公共建築は、前述の文学碑からも中津川からも少し離れて、県庁舎のならびに建つ。早稲田大学建築学科の開基として建築史にその名を残す佐藤功一 (さとう・こういち) の設計で、1927年 (昭和2年) に竣工した。同じ年に佐藤の設計で早稲田大学大隈講堂が完成し、翌々年の1929年には日比谷公会堂も竣工している。

宮沢賢治の母校にも賢治にまつわる地域資源が大切に残されている。写真－11 に掲げる旧盛岡高等農林学校本館は、赤煉瓦を積んだ基礎に木造下見板張りを築いた西

洋建築である。官立盛岡高等は、わが国で最初の高等農林学校であった。良好な教育施設を建てた1912年 (大正元年) 当時の国家的な姿勢が感じられる。現在は岩手大学農学部附属農業教育資料館として活用されている。やはり国指定の重要文化財である。

建造物という姿の地域資源ばかりを岩手県盛岡市から挙げてきた。次は精神文化としての宮澤賢治を札幌にあって見詰めたい。

2013年 (平成25年) 3月2日土曜日から同月24日日曜日まで札幌駅前のJR プラニスホールにて、『宮沢賢治・詩と絵の宇宙 雨ニモマケズの心』が開催された^{注28)}。こらは京都から始まって、神奈川、福島、広島、北海道を経て、姫路、世田谷、静岡、盛岡、そして岡山県の新見へと巡回する展覧会である。時機を得た企画展であった。

全国各地それぞれの会場は固有の空間を有している。したがって展示品の配置などに会場ごとの事情が反映される可能性がある。記録として下記に札幌会場のようすを記しておきたい。まず展示室前の小ホールでは、3本の映像が自動再生されていた。

展示映像「雨ニモマケズ」の心 約11分

「雨ニモマケズ」作・宮沢賢治 朗読・草野心平 約2分

「原体剣舞連」(mental sketch modified) 作・宮沢賢治 朗読・宮澤清六 約6分

ここには10数脚の椅子が用意されており、上記3本の

映像を熱心に見聞きする人々の姿があった。つづいて展示室であるが、オリジナルの出品作品を保護する目的で、照明が落とされていた。順に展示内容を列記する。

「雨ニモマケズ手帳」

「雨ニモマケズ」詩碑建立のための書 高村光太郎・筆

棟方志功 「雨ニモマケズ」

全12点 1936年 木版／紙 ガラス入り額装 ①と②に朱印

小林敏也 「雨ニモマケズ」

縦位置16点と大版横位置（見開用）2点の合計18点
1991年 木版／紙 パロル舎 お手を触れないで下さい、という特別な表示あり。 ガラスなしパネル装丁
全作品スミ刷り

関野準一郎 「宮沢賢治肖像」

1953年 多色刷り 木版／紙 4／30 Junichiro Sekino のサインあり ガラス入り額装

賢治自筆の絵画5点 ガラス入り額装

『注文の多い料理店』の広告 ガラス入り額装

絵本用の「賢治童話」原画 9話 ガラス入り額装

吉田佳広 「イーハトーブの（空想）地図」

1986年 タイポグラフィ ガラスなしパネル装丁

絵本用の「賢治童話」原画 13話 ガラス入り額装

「賢治の原風景をたどる」

横位置3点 花巻市 花巻駅周辺 盛岡市

絵本用の「賢治童話」原画 7話 ガラス入り額装

帽子をかぶり外套を着て戸外に立つ宮沢賢治像（写真） 当展覧会では「1926年初めころ 花巻農学校附近にて」としている。

絵本用の「賢治童話」原画 10話 ガラス入り額装

絶筆 「方十里 稗貫のみかも／稲熟れて み祭三日／そらはれわたる」

「病^{いびつ}のゆゑにもくちん／いのちなり／みのり^に／尔棄てば／うれしからまし」

妹トシの死、賢治の最期、「賢治詩」原稿、國譯妙法蓮華經、弟妹あて書簡、略年表
以上が展示室の全容である。

本章の都心の地域資源では再度、札幌の北1条西1丁目に1年前まで存在した旧王子サーモン館の姿を、写真-12に掲載して記憶にとどめたいと考える。札幌建築鑑賞会とN43赤煉瓦塾の双方に深いかかわりを持っていた総塩焼き煉瓦の外観を見せた都心の観光資源を札幌市民は、21世紀にあってさえも守ることができなかった。旧道庁の赤煉瓦、白い西洋館の時計台から、歩いて数分という至近距離に立地した資源は、おそらく経済的な効果をふるさと札幌、北海道にもたらしてくれたであろうものを。

1995年（平成7年）1月7日の阪神淡路大震災や2011年（平成23年）3月11日の東日本大震災で失った建築物の多さは膨大な数量にのぼる。しかしながら残念なことに私たち自身が、地域の記憶を根こそぎ消し去っているのも事実である。まるで無常な大津波と、なんら違いがないかのように。

いつの日にか札幌の都心に、第二次世界大戦後の復興を志した人々の象徴として旧王子サーモン館を、現地に原寸大で復元する時代が来るのかもしれない。事実それと同じ復元工事を東京の丸ノ内で実現して見せた企業グループがある。それだけでなく現役の煉瓦造駅舎を毎日使用しながら、3階建ての姿に復した鉄道会社もある。いずれにしても21世紀初頭の札幌市における地域資源への意識の低さと、経済活性化への欲のなさが露呈したこの1年間であった。

IV. む す び

本稿は東日本大震災で被災した東北地方への思いから想起されたものである。今回の大震災で、地域の財産が流されてしまった。だが震災により、改めて強く意識されたものもある。地域の資源は災害復興にあっても、平時のまちづくりにおいても、ともに活用することが可能な財産であると考え。

石の建築物、煉瓦の建築物、石川啄木ゆかりの場所、宮澤賢治が見渡した風景など、全てが固有のかけがえのない地域資産である。札幌や江別においては、残念ながら未だに花巻市や盛岡市レベルの文学者を前面に出したまちづくり活動は顕在化していない。生涯学習社会の構築に向けて、今後に取り組むべき課題となろう。

付記

本研修に関しては、北翔大学北方圏学術情報センター「ポルト」の生涯学習研究部より研究費を受けた。深甚なる謝意を表すものである。研究主題は「北海道・東北における文化遺産の活用に関する研究」である。当調査研究では北海道地域での文化遺産の活用実態と東北地域のそれについて、現地踏査を通じて明らかにすることを目的としている。さらに進んで、それぞれの地域における文化遺産の活用実態に地域的な特色があるのか否かについても見極めたいところである。本稿はその研究成果の途中経過を報告したものである。

前年度以前から本年度にかけて花巻市の宮澤啓祐商工会議所会頭、宮澤商店の菊池栄七常務、牛崎敏哉まちづくり部宮沢賢治記念館副館長、佐藤正眞まちづくり部生涯学習課課長、菊池剛史まちづくり部生涯学習課生涯学習係副主任に、一方ならぬ力添えを賜った。さらに宮澤

啓祐氏を御紹介くださった佐々木茂喜博士（医学）、宮澤氏からのお声がかりで参集いただいた古館正壺様、岩田和夫様、栗原浩太様、菅原忠男様、菅原勝男様、駿河サダ様、高橋二三夫様、伊藤明子様に、おん礼を申し上げます。煉瓦の製造史ならびに施工史に関する貴重なお話を頂戴することが出来た。さらに以前から国立大学法人岩手大学宮澤賢治センター代表の岡田幸助教授、同センターの佐藤竜一氏、同大学ミュージアム解説ボランティアの会の佐々木三代四氏から特段の御配慮を賜っている。また啄木研究に際しては財団法人石川啄木記念館の菅原壽館長ならびに山本玲子学芸員、＜盛岡＞設計同人の代表で建築家の渡辺敏男様、そして函館市文学館の森武前館長からも終始ご指導をいただいている。末尾になってしまったが、この紙面を拝借して謝意を表わすものである。

注

注1) 竹内桂佑：「江別らしい街並み目指す／拡幅の野幌8丁目通／地権者らが協定策定／建物にれんが使用／店先や店内を緑化」、『北海道新聞』、北海道新聞社、2012年（平成24年）12月8日

注2) 今井宏：「日曜ナビ ほっかいどう100の道 道番号56 氷点通り（旭川市）／三浦文学の原点に導く」、『北海道新聞』、北海道新聞社、2012年（平成24年）12月16日、P-1。今井宏：「ほっかいどう100の道 道番号56 氷点通り 清らかさ満ちる見本林」、前掲『北海道新聞』、2012年（平成24年）12月16日、P-2

注3) 佐藤俊義：「札幌建築鑑賞会・札幌軟石文化を語る会合同企画「札幌軟石発掘大作戦」／ただいま西区の軟石調査を展開中！」、『札幌建築鑑賞会通信 キーすとーん No.62』、札幌建築鑑賞会、札幌建築鑑賞会、2012年9月1日、P-3。佐藤俊義：「札幌建築鑑賞会・札幌軟石文化を語る会 合同企画／札幌軟石発掘大作戦「西区の陣」が終了！」、『札幌建築鑑賞会通信 キーすとーん No.63』、札幌建築鑑賞会、札幌建築鑑賞会、2012年12月25日、P-3

注4) 札幌建築鑑賞会：「札幌軟石発掘大作戦「南区の陣」の成果を展示します！」、『札幌建築鑑賞会通信 キーすとーん No.62』、札幌建築鑑賞会、札幌建築鑑賞会、2012年9月1日、P-3。札幌建築鑑賞会：「いんふおめーしょん／札幌軟石発掘大作戦「南区の陣」の成果展示が終了」、『札幌建築鑑賞会通信 キーすとーん No.63』、札幌建築鑑賞会、札幌建築鑑賞会、2012年12月25日、P-8

注5) 朝日新聞社：「解体間近の旧王子サーモン館／市民団体が内部見学」、『朝日新聞』、朝日新聞社、2012年（平成24年）1月30日、道内面。升田一憲：「れんが造りに別れ／旧王子サーモン館 解体前に見学」、『北海道新聞』、北海道新聞社、2012年（平成24年）1月30日、札幌圏版

注6) 升田一憲：「札幌市中心部／迫る再開発／旧王子サーモン館／解体の危機／歴史あるれんが造「存続を」／費用負担など課題も」、『北海道新聞』、北海道新聞社、2011年（平成23年）11月15日。北海道新聞社：「リサーチさっぽろ／歴史的建造物どうすべき？／旧王子サーモン館解体／半数が「残すべき」／撤去やむなし、／議論必要の声も」、『北海道新聞』、北海道新聞社、2012年（平成24年）3月3日、札幌圏版

注7) 粕谷武史：「旧王子サーモン館 建築鑑賞会が調査／雪に耐えた塩焼きれんが／製造困難「解体もったいない」」、『北海道新聞』、北海道新聞社、2013年（平成25年）3月25日。札幌建築鑑賞会：『王子サーモン館 土地と建物の記憶』札幌建築鑑賞会、2013年3月。札幌建築鑑賞会：「第10回「札幌百科」のご案内／王子サーモン館 土地と建物の記憶」、『札幌建築鑑賞会通信 キーすとーん No.63』、札幌建築鑑賞会、札幌建築鑑賞会、2012年12月25日、P-2。札幌建築鑑賞会：「追憶の建物たち／王子サーモン館（中央区北1条西1丁目）」、前掲『札幌建築鑑賞会通信 キーすとーん No.63』、P-6

注8) 北海道新聞社：「札幌の歴史的建築物」、『北海道新聞PR誌 道新ポケットブック 北海道遺産ガイド』北海道新聞社、北海道新聞社、2013年2月、PP.24-25。渡部満：「北の建物 守り育てる 小樽 茨木家中出張（なんでばり）番屋」、『北海道新聞』、北海道新聞社、北海道新聞社、2012年（平成24年）3月27日。伊藤和博：「北の建物 守り育てる 滝川 太郎吉蔵」、『北海道新聞』、北海道新聞社、北海道新聞社、2012年（平成24年）7月23日。小玉勝信：「北の建物 守り育てる 紋別 上藻別駅通」、『北海道新聞』、北海道新聞社、北海道新聞社、2012年（平成24年）10月22日。丸藤競：「北の建物 守り育てる 旧丸井今井百貨店函館支店」、『北海道新聞』、北海道新聞社、北海道新聞社、2012年（平成24年）11月26日。小坂実：「北の建物 守り育てる 利尻・旧渡辺商店」、『北海道新聞』、北海道新聞社、北海道新聞社、2013年（平成25年）2月25日。水野信太郎：「北の建物 守り育てる

江別 旧岡田邸」、『北海道新聞』、北海道新聞社、北海道新聞社、2013年（平成25年）3月25日、P-17。絵と文・佐藤正人＝北海道イラストレータークラブズクラブα会長「いしかり散歩 48 旧ヒダ工場 江別市」、『北海道新聞』北海道新聞社、北海道新聞社、2013年（平成25年）3月15日ほか

注9) 岩本進：「発信2012／旭川に啄木の歌碑を 上／古里会 没後100年、建立を提言」、『北海道新聞』、北海道新聞社、2012年（平成24年）4月10日。岩本進：「発信2012／旭川に啄木の歌碑を下／披露へ 市民とファン結ぶ象徴」、『北海道新聞』、北海道新聞社、2012年（平成24年）4月11日

注10) 北海道新聞社：「啄木歌碑像旭川にお目見え／没後100年命日／市民団体が除幕／函館では追悼会」、『北海道新聞』、北海道新聞社、2012年（平成24年）4月14日

注11) 黒川伸一：「偕楽園緑地の／啄木歌碑完成／中国から搬送 来月15日に除幕式」、『北海道新聞』、北海道新聞社、2012年（平成24年）8月18日

注12) 「啄木最期の地に石碑 文京区 介護施設内に展示物」、『日本経済新聞』日本経済新聞社、日本経済新聞社、2012年（平成24年）7月6日、P-35東京・首都圏経済。これとは別に「「啄木終焉の地」歌碑建設にご協力ください。」啄木終焉の地歌碑建設実行委員会という紙面もある。これは会長 井上義一 副会長 近藤典彦 三上満 事務局長 大室精一としてあり、さらに2012年8月10日現在の呼びかけ人、総数101人の氏名も掲げられている。上記の事務局長 大室精一先生は、佐野短期大学教授であり、国際啄木学会理事でいらっしゃる。さらに、その紙面とは別に2012年9月付けの手紙文がある。啄木終焉の地 歌建立碑実行委員・佐藤 勝の名で協力者に「呼びかけ」の拡大を依頼するものである。関係者一同の精力的な努力が実を結ぶことに期待したい。

注13) 北海道新聞社：「啄木の墓・なぜ函館に／あす没後100年／歌、友・・・人生に転機／各地で記念行事」、『北海道新聞』、北海道新聞社、2012年（平成24年）4月12日

注14) 黒川伸一：「文化／石川啄木 没後100年⑧／啄木と遺産／北海道のドラマ随所に／「小樽のかたみ」など残す」、『北海道新聞』、北海道新聞社、2012年（平成24年）8月27日、P-15。黒川伸一・岩本茂之：「文化／石川啄木 没後100年⑨／啄木短歌を見つめ直して／音楽・映像性色濃く

／作家新井満さん北海学園大准教授田中綾さん対談 上／若者の心とらえる二面性 田中／作曲の才能あったのでは 新井」、『北海道新聞』、北海道新聞社、2012年（平成24年）9月24日、P-17。黒川伸一・岩本茂之：「文化／石川啄木 没後100年⑩／啄木短歌を見つめ直して／憧れ、希望

感性今も／作家新井満さん北海学園大准教授田中綾さん対談 下／絶望せず空見上げる若さ 新井／切実な言葉復興への提言 田中」、『北海道新聞』、北海道新聞社、2012年（平成24年）10月1日、P-15。黒川伸一：「ぶらり寄り道／啄木の息遣い 随所に」、『北海道新聞』、北海道新聞社、2013年（平成25年）2月24日、P-2

注15) 川島博行：「ほんのひととき 石川啄木に親しんだころ」、『北海道新聞』、北海道新聞社、2012年（平成24年）2月26日。長浜功：「漏洩めぐり対立と和解／「石川啄木日記」公刊秘話／娘婿・石川正雄と吉田孤羊」、『北海道新聞』、北海道新聞社、2013年（平成25年）3月19日

注16) 田村元：「文化／五番館が結ぶ啄木との縁／第一印象は赤れんがの美しさ／松川先生に出会い短歌の世界に」、『北海道新聞』、北海道新聞社、2012年（平成24年）2月18日、P-15

注17) 『別冊太陽 日本のこころ195 石川啄木 漂白の詩人 没後100年記念』編集人 湯原公浩、発行所 平凡社、2012年5月24日

注18) 立花峰夫：「啄木の残像 代用教員と啄木」、前掲『別冊太陽 日本のこころ195 石川啄木 漂白の詩人 没後100年記念』PP.118-119および立花峰夫：「啄木の残像 浜民村の啄木の風景」PP.120-125

注19) 佐藤勝：「緋く鍵 新詩社「明星」と啄木のゆかり」、前掲『別冊太陽 日本のこころ195 石川啄木 漂白の詩人 没後100年記念』P-59。佐藤勝：「緋く鍵 観潮楼歌会 鷗外と啄木」P-62

注20) 佐藤勝：「緋く鍵 雅号由来 翠江、麦羊子、白蘋、啄木」、前掲『別冊太陽 日本のこころ195 石川啄木 漂白の詩人 没後100年記念』PP.57-58。佐藤勝：「啄木の残像 歌集『一握の砂』所載の広告文」P-151

注21) 札幌市清田図書館：『没後百年 石川啄木の世界』札幌市清田図書館、2012年10月25日（これは森昌彦司書が製作し、同図書館において発行した資料）。北海道新聞社「資料で振り返る／石川啄木の世界／札幌 清田図書館で没後百年展」、『北海道新聞』、北海道新聞社、2012年（平成24年）11月5日

- 注22) 「わが村は美しく vol.81 むかわ町編 ほべつ
銀河鉄道の里づくり委員会」, 『The J R
Hokkaido No.298』編集・発行人／石見誠嗣,
発行所／(株)北海道ジェイ・アール・エージェン
シー, 2012年12月1日発行12月号, PP.34-35。
宇梶義広: 「賢治と穂別」, 『北海道新聞』, 北海
道新聞社, 2011年(平成23年)8月2日
- 注23) 中村公美: 「富田勲の新作「イーハトーブ」交響
曲 東京で23日初演／メインボーカルに初音ミク
／現代アートとの融合 宮沢賢治の異次元性表
現」, 『北海道新聞』, 北海道新聞社, 2012年(平
成24年)11月18日。北海道新聞「初音ミク 賢治
の世界表現／富田勲さん新作交響曲のボーカルに
起用」, 『北海道新聞』, 北海道新聞社, 2012年
(平成24年)11月24日
- 注24) 北海道新聞「蔵書電子化し無料配信／来月3日ま
で国会図書館が13作品」, 『北海道新聞』, 北海道
新聞社, 2013年(平成25年)2月4日
- 注25) 編集; 佐田沙彩花(松竹), 『グスコブドリの
伝記』, 発行承認: ワーナー・ブラザース映画,
発行: 松竹株式会社事業部, 2012年7月7日
- 注26) 水野信太郎「宮沢賢治のふるさと花巻と煉瓦」,
『産業考古学 第144号』, 産業考古学会, 産業考
古学会, 2012年6月20日, PP.17-18
- 注27) 宮澤商店「合名会社／宮澤商店」, 『岩手タ(岩
手タイムズか, 部分的な破れのため以下は判読不
可能)』岩手タイムズ, 岩手タイムズ, 昭和7年
5月26日(2012年9月8日9時33分宮澤商店より
北翔大学への「ファクシミリ」に基づく)
- 注28) 天沢退二郎(詩人)監修: 『宮沢賢治・詩と絵の
宇宙 雨ニモマケズの心』アート・ベンチャー・
オフィスショウ, 2012年。まんまる新聞: 「“雨
ニモマケズ”の手帳, 自筆水彩画などの展示も
／JRタワーで「宮沢賢治」展／3月2日から
24日」, 『まんまる新聞』まんまる新聞, まんま
る新聞, 平成25年3月1日。山田崇史: 「「雨ニ
モマケズ」直筆メモも／札幌で宮沢賢治展開幕
／水彩画, 資料, 挿絵原画など70点」, 『北海道新
聞』, 北海道新聞社, 2013年(平成25年)3月3
日

